

2015. 11. 26 (木)

希望を持つということ

Jeffrey Mensendiek

「わたしの魂よ、主をたたえ。
わたしの内にあるものはこぞって聖なるみ名をたたえよ。
わたしの魂よ、主をたたえ。
主の御計らいを何ひとつ忘れてはならない。」 (詩編 103 編)

聖書の中には詩編というものが含まれています。今日は、その 150 の詩篇の中から 1 つ、103 編を読んでいただきました。これは、私にとってとても意味の深い言葉で、自分が物心ついた頃から身近にあった言葉です。

父は大学の先生であり、また、宣教師でした。個性の強い人で、家族の中で一番声が大きい存在でした。しかも頑固でした。いつも私たち子どものやるべきことを決めていました。ですから、私たち兄弟は、いつも心の中では父に逆らいながら、でも表では従うしかない、そのような強いお父さんでした。父が仕事から帰ってくると、夕食の時間でした。私たちは食卓を囲んで、まずは食前の祈りをするわけです。殆どと言っていいほど父がお祈りをするのですが、父は普段はインドの貧しい子どもたちのことや、当時はベトナム戦争の悪い影響が沢山あったのでベトナム戦争で苦しんでいる人ことなど、必ず世界で苦しんでいる人たちのことを思いながらお祈りをしました。

しかし、時には仕事から疲れて帰ってくることもありました。また、ある時は父の弟が突然脳内出血で亡くなるという出来事があった、本当に大きなショックで、祈る気力が無いほどの時もありました。そのような弱い時、何を祈っていいかわからない時に、父が決まって祈る言葉が詩篇の 103 編でした。これは英語で読むと韻を踏んでいてとても素晴らしいリズムがありますので、今日読んで聖書の箇所を英語で言ってみたいと思います。

“Bless the Lord, O my soul ;
and all that is within me,
bless God’s holy name!
Bless the Lord, O my soul,
and forget not all God’s benefits.”

繰り返し “bless” “bless” “bless” と祈られるこの流れが、いつの間にか私の耳に焼き付いてしまいました。そこで、今日のテ

ーマとなっている「希望」。皆さんはどのような時に希望を感じるでしょうか。人はよく現代のことを、あまり希望を感じられない社会と表現します。でも、そのような中で、例えば今年9月に政府が安保法制を通した時に多くの若い人たちがデモに加わって、今までとは違うスタンスで政府に対して声を上げました。みんなで結束して声を上げたその姿を見て、希望を感じたと言う人がいます。また、10日ほど前に起きたパリの連続テロ事件で130人を超える人が命を落としました。その中で、妻を殺されたある男性が、フェイスブック上でテロリストに対してメッセージを発信しました。「殺人者よ、私は憎しみというプレゼントをあなたに与えません」と。この男性は「わたしはやられたらやり返す運命にない。人間の心は自由だ。自分の生き方はそれぞれが選べるのだ。」ということをフェイスブック上で表現しています。それを見て希望を感じた人もいたのではないのでしょうか。

世界の出来事もそうですが、身近な日常の中で希望を感じることも多くあります。たとえ目先が真っ暗になったとしても、一筋の光が見えてくることがあります。そのような光を私たちは求めて、見だして、生きる力を与えられているのではないのでしょうか。

よく「希望を感じる」と言いますが、状況が真っ暗になったときにも、何も周りに希望を感じる事ができないときにも、希望はあるのでしょうか。一般的には「希望を感じる」と言いますが、希望とは感じなければならぬものなのでしょうか。

私は人生の中で1度だけ燃え尽き症候群となって、一時うつ症状を経験したことがあります。あれは東日本大震災の後でした。私

の職場が被災支援をする場所になって、各地からボランティアを受け入れるような毎日でした。いろいろあったのですが、震災から2カ月たった頃、急に私の体と心がシャットダウンしたのです。何も感じる事ができない、立ち止まると涙が止まらない、寝ようとしても眠れず、考えはいつも激しくマイナスの方向に向かってしまうのです。そのような自分を受け止めつつ、今までに感じたことのない自分の弱さと限界を知りました。

そのような何も感じられない状況の中で、「希望はある」と言えるのでしょうか。聖書を読んでいると、どうやら希望というのは、私たちの五感によって感じるものだけではないようです。五感に頼らないというか、もちろん、お話したように五感を使って日常的には感じるのですが、そればかりではなくて、希望というのはもっと深いものとして、聖書は描いているといえます。例えば、イエスが十字架につけられてみんなに背を向けられたときに、イエスの心に希望はあったと言えるのでしょうか。

私は今でも、自分が経験したあの無力感を振り返って、何が自分を支えたのだろうかと考えることがあります。聖書の伝える希望の根拠は、どこにあるのでしょうか。それは、神様と自分を結び関係性にあるといえます。冒頭で紹介した父の祈りのようなものです。弱い時に向かい合う相手がいるということです。この詩編103編は、人生を貫いて繰り返し使えるツールとして、私はすごく大事にしてきました。この中に聖書が伝える希望のメッセージが含まれているように思います。もう一度、日本語で読んでみますね。

「わたしの魂よ、主をたたえ。

わたしの内にあるものはこそぞって
 聖なるみ名をたたえよ。
 わたしの魂よ、主をたたえ。
 主の御計らいを何ひとつ
 忘れてはならない。」

「御計らい」という言葉は難しいですね。神様の恵みとか、神様の計画、それを何ひとつ忘れてはならないということです。特に弱い時にこのような詩編の祈りが口からポロっと出る、そのような生き方をしたいと思いません。

この短い詩は、神様にささげられている祈りです。自分がいて、自分が声を発して、そして、それを受けとめて下さる相手がいます。自分と神様の関係が土台となっている詩です。希望を持つということは、自分の命が、自分を越えた存在によって愛され、育まれ、支えられているという関係性の中に置かれている確信からきます。決して一人ではありません。自分のこの命には意味がありま

す。そして、相手のまなざしの中に自分が今あるということ、そのことが希望なのだと、聖書は伝えているのではないのでしょうか。

若い皆さんはきっと、自分のこれからの人生を一生懸命考えていると思います。一度しかない命だから最大限に生きたいと願っていることでしょう。私も大学生の頃は、そうでした。大学でいろいろなものを吸収して、自分のスキルを磨いて社会に出て、人の役に立ちたい、若いというだけで何か希望を豊かに持っているようにも思えます。でも、30年前に大学を卒業した私が、あの30年前の自分を振り返ると「ああ、意気込んでいたな」と思います。そして、今になってようやく分かってきたことがあります。それは、力を抜いても希望はあるということです。不思議です。詩編103編の詩人の祈りが、そのことを今の私たちに教えているのではないのでしょうか。神様を信頼する、その心が、希望であるのです。

(宗教センター宗教主事)